



子どものそばにある短歌⑧／千葉聡 2
作家と画家がであうとき④
『むしたちのうんどうかい』／久住卓也 3
今こそ心と心がつながる紙芝居を／汐見稔幸 4
わたしの原風景④／村中李衣 7
イラスト／和歌山静子



違和感は呑み込まずに

浜田桂子

先月都内で、「私たちの国が戦争を始めた—反戦ロシア人たちの証言」という集いがありました。日本に住むロシア人3人が登壇し、ウクライナ人と一緒にいるというロシア大使館への抗議や、街頭で訴える活動を報告。女性の1人は「ロシアの友人が、プーチンはウクライナで弾圧されているロシア人を救っていると、信じて疑わないのです」と涙ながらに話しました。ロシアの著名なジャーナリストであるタチアナ・フェルゲンガウアーさんが、リトアニアからこの集いのためにビデオメッセージを寄せました。彼女は独立系ラジオ局「モスクワのこだま」の元副編集長で、選挙の不正など政府に批判的な報道で知られており、2017年に何者かに襲撃されています。彼女の「どんなことがあっても私は真実を伝えます」の言葉に救われつつ、あらためて考えさせられたのは、戦争と思想・表現の統制は一体であること、それらは周到に準備されていくということです。

現在のロシアの状況は、かつての日本と重なります。侵略戦争を遂行する国策に人びとを同調させるため、国はあらゆる方法で思想や表現を取り締まりました。1938年国家総動員法公布の後は児童書への介入も顕著になり、出版社はたびたび招集され編集方針の指導や命令を受けています。当時の月刊絵本を見ると「マンシウ」や「ヤスクニジンジャ」や「トクベツコウゲキタイ」などが登場しますが、驚くのは絵の完成度の高さです。私たちの先輩画家のほとんどは、拒否するどころか張り切って描いたのだと思います。異論が排除され社会が一色に染められた状況下で、それは当然だったのかもしれません。

今年8月に、ある事が起きました。文部科学省が全国の公立・学校図書館宛てに「北朝鮮当局による拉致問題に関する図書の実を」という文書を出したのです。「(それらの図書が) 児童生徒や住民が手にとりやすい環境の整備」に協力するようにと。文科省が特定の政治テーマの選書について図書館に働きかけたのは、戦後初めてです。当然ながら日本図書館協会は「是認できない」と意見書を出しました。

こうした現実があるなかで、私は「子どもに読書の喜びを、生きる力を」と、自ら本を選び手渡す活動を続けている全国各地の方たちの存在を、とても頼もしく思うのです。どこかで勝手に「良い本」「悪い本」が決められたりしないよう、違和感は呑み込まずに共有したい。新しい年を迎えようとしている今、そんなことを考えています。

(はまだ けいこ／絵本作家)

子どものそばに ある短歌

8

—— ケーキの思い出 千葉聡

ショートケーキの尖った方を北へ向け「出航だ」って真顔できみは

ユキノ進^{すすむ}『冒険者たち』

ケーキを前にすると、やはり嬉しい！ ケーキの船に乗った海賊の気分で「出航だ」と言ってみたくありません。

クリスマスが近づくと、ケーキ屋さんの店先が華やきます。ピカピカのツリー、サンタのぬいぐるみ。ふと立ち寄って、ショーケースを眺めていたら、隣には会社員らしき二人組。

「うちの子、初めてのクリスマスなんだ。小さなケーキでいいんだけど……」

一人がそう言つと、もう一人も笑顔でうなずきました。まだ若いお父さんたちでしょうか。二人は、それぞれ小さなショートケーキを選びました。僕も、同じようなケーキをいくつか買いました。

小さかったころ、ときどき父がケーキを買ってきてくれました。「いっせーのせ、で開けよう」と兄が言い、母も弟も寄って来て、ときどきしながら箱を開けた、あの瞬間。誰がどのケーキを食べるかで盛り上がった、楽しいケンカ。

お気に入りの「ラスカルのお皿」に置かれたショートケーキは、夢を運んでくれる船だったのかもしれない。

ちば さとし 1968年生まれ。歌人・高校教諭。著書に『短歌は最強アイテム』（岩波ジュニア新書）、『グラウンドを駆けるモーツァルト』（角川書店）などがある。

作家と画家が であうとき ④

『むしたちのうんどうかい』



「むしたちのシリーズ」(全6冊)
得田之久・文／久住卓也・絵
2001～2012年

得田之久さんへ

キラキラ光る

辻堂のあの日から

久住卓也

得田さん、お手紙ありがとうございます。

『むしたちのうんどうかい』が僕の絵本のスタートです。当時童心社の編集者だった横山雅代さんから原稿のコピーを渡され、一度辻堂の得田さんのお宅に伺いましょうということになりました。

まだこの原作をどう描くかも全く決めていない白紙の状態です。僕は緊張していたと思います。初対面の得田さんはニコニコしながら「絵はクスマ君に任せるから楽しくやってよ」と作画への注文はいい感じでした。昆虫の精密なタッチと文章で絵本をつくってこられた得田さんは「これからは絵は誰かに描いてもらうことにしたんだよ」と嬉しそうでした。得田さんにも新たなスタートの作品だったのです。僕はすっかり緊張もとれ、奥様の美味しい昼ごはんをいただき、さらに晩ごはんまで馳走になりました。得田さんの輝く少年時代の話、虫取りの話、いろいろな編集者の話、映画の話、本の話、子育ての話など取

り留めもなく話をしましたね。

今になってあの日のことを思い出すと、あの取り留めのない会話の中にキラキラ光る創作のための大切なモノが詰まっていたと思えてなりません。帰りに横山さんと別れた後も興奮が冷めず、電車の中で原稿のコピーを取り出し、思いつくことを余白に書き込んでいました。

「虫をいっぱい登場させる」「コチャコチャにならない事」「虫の生態の面白さが一番大切」「にぎやかでも静か」「画面の左から右に動かす」「ペーシングに速度を上げたり落としたりする」……など。

横山さんが僕のどんな絵をお見せになり得田さんが気に入ってくれたのかは謎のままなのですが、『むしたち』がシリーズになっていったころ、得田さんが「いや、クスマ君を虫の絵で絵本デビューさせちゃって申し訳ないよ」と笑いました。いやいやこの第一作には、僕が絵を描く時に今も大切にしている呪文が入っているのです。そうミイデラ「ミムシの「よいい、ブーッ」です。このスタート合図を唱えると、無駄な力みが抜けていい線がひけるんです。どんな物語でも描ける気になります。この作品で僕を「よいい、ブーッ」とスタートさせてくれた得田さんと横山さんには感謝しかありません。

(くすみたくや／漫画家・絵本作家)

今こそ 心と心がつながる

紙芝居を

童心社では創業以来、紙芝居を出版しつづけています。
これまで「母のひろば」でも
紙芝居の持つ力や、絵本とは違う魅力について、
たくさんの方にお話を伺い、語り合ってきました。
今回は教育学、保育学の第一人者である
汐見稔幸さんに、「語り」という観点から
紙芝居の魅力を語っていただきました。



汐見稔幸（しおみとしゆき）

一九四七年大阪府生まれ。東京大学名誉教授、日本保育学会会長。専門は教育学、教育人間学、保育学。自身も3人の子どもの育児を経験。持続可能性をキーワードとする保育者のための学びの場「へつたら村」村長。NHK Eテレ「すくすく子育て」などに出演。主な著書に『子ども・保育・人間』（学研）『はじめて出会う育児の百科』（共著、小学館）など多数。

語りの
文化としての
紙芝居

今回は、紙芝居が子どもの育ちにおいて、どのような影響を持ち得るか考えてみようと思います。

演じ手がいて、観客がいる。そして演じ手が観客にむかって物語を語りかける——紙芝居の大きな特徴は、そんな「語り」の文化の流れにあることだと思えます。

「かたる」という言葉は日本固有の語である言葉、和語のひとつと言われています。のちに三つの漢字が当てられました。ひとつは「語る」。あとふたつは「騙る」と「交る」です。

「語る」は字の通り、吾が言うという意味です。大事な事を心を込めて伝える時には、「語る」を使ってきました。「騙る」は人をフィクションの世界に連れて行く、実際にはないものを存在するようにする、ある意味騙すということですね。「交る」は、人と人が心を込めた言葉によって交わり合うことを指した言葉です。似た言葉に「話す」がありますが、少し意味がちがいます。NHKのラジオ放

送が始まってから、「話す」という言葉が日常的に使われるようになりましたが、アナウンサーが情報を伝えること、すなわち舌がしゃべるのが「話す」です。別の漢字を当てると「放す」や「離す」。つまり言葉を投げる、出してしまおうという意味が強いのです。

語りには、その人の人格が出てきます。そして発声を通して、語る人も聞く人も音の意味を多層的にとらえることができる。かつての無声映画には、映画の内容を語る弁士がいましたが、これも語りの文化です。有声映画が主流になるにつれ、弁士は職を失っていきませんが、そういった語りの文化が減ってきていることを大変残念に思っています。

そこで紙芝居です。紙芝居は日本が編み出した子どもの文化であり、語りの文化と言えるでしょう。

子どもたちは、弁士、つまり演じ手の「語る」言葉と絵を媒介にして、物語の世界に引き込まれていきます。そして、ハラハラドキドキする気持ちをみんな味わう、つまり「騙る」世界を生きる。その中で周りにいる子たちと心を交わらせていく。「交る」体験をするということ

とですね。そうして、互いにしつとりと仲良くなり、縁が結ばれていく、それが紙芝居の持つ力だと思っています。

人と人の縁を
結ぶために

今、日本社会は、人と人の縁が無くなっていく無縁社会に向かっています。

昔は地域社会が生きていて、街に様々な人がいる中で、漠然としたゆるい繋がりが存在していました。ところが今は、地域がただ寝に帰ってくるだけの場所になってしまいました。地縁、血縁の関係性が弱くなり、マンシヨンの隣人が誰かわかりません。

SNSで簡単に人と繋がることができようになりましたが、コミュニケーション手段としては不十分です。SNSは必要な情報だけを細切れに流すので、言葉に込められた思いまでは伝わりません。だから、直接言葉を交わしていれば起こらないような誤解が生じたり、余計な解釈をしてしまったりする。SNSは人と

人が深く交わり合うコミュニケーションではないのです。

人と人が一緒にいる時、言葉のような明確な情報以外にも身体は無数の情報を発信しています。例えば、体温が伝わってくるのを肌で感じるように、身体で様々な情報を送りあっている。受けては返し、返しては受け、無数の身体的コミュニケーションが、人間を落ち着かせてくれるのだと思います。それはSNSでは補填できません。

以前、「全国子ども食堂支援センター・むすびえ」の理事長をされている湯浅誠さんが話していたことですが——ある小学生が、子ども食堂で漢字ドリルをやっていたそうです。側でその子の父さんと学習支援の大学生が黙って見守っている。女の子が一時間ずっと漢字ドリルをやっているの、お父さんが驚いたんですね。家ではこんなに集中して宿題をやれないのにどうしてかと。

宿題のようにやらされるものは、そもそもの目的意識が弱いので、ひとりで行っている、さぼってしまったらしいです。頑張っても誰にも認めてもらえないので張り合いもない。自分の味方である

誰かの眼差しの中で、やる気がでてくるのです。それが縁です。

社会から人と人が群れ合う体験が減ってきていることは、取りも直さず、子どももそういった体験を減らしてきているということなのです。

ひとりの世界で、人間は生きてはいけません。気の置けない人たちとの交流の中で、人間の心身は活性化されるのです。そういった身体的なコミュニケーションが人間としての基本的なあり方だと思うのです。

社会が無縁性に向かっていている今、子どもの時に縁をつくり合うような体験をたくさんしてほしい。その意味で紙芝居は大いに活用できると思うのです。大人になってから、いきなりコミュニケーションを上手にとりなさいなんて言われても、難しいわけですから。

身体で「聞く」ということ

身体的なコミュニケーションには、相手から感じとること、つまり、聞く力が問われます。けれど近代社会では、強くなること、勝つこと……そういった価値

観が大事にされ、聞くことがなおざりにされました。自然が何をうったえかけているか聞けなくなった結果が、今直面している環境問題です。昔の人は、自然が語るところを直感的に聞くことができたと思うのです。

「聞く」も和語のひとつです。派生語は、聞き下手、聞き惚れる、聞き流すなど、百ぐらいあります。日本人が、聞くことに文化的な価値を置いてきたことが言葉からわかります。「聞く」に関わる言葉をたくさん生み出して、微妙な聞き方の違いを大事にしてきたのですね。

聞くということは、世界から、他者から、何かを受け止めるということですが、裏を返せば、世界によって、他者によって支えられているという実感を得ることもあります。

学校教育の現場では、教師がいちばん聞くことができていません。哲学者の久野収さんも、日本の学校教育は、教師がどう話すかばかりを研究していると厳しい批判をしました。どうやってわからせるか、どう従わせるかばかりを研究して、当の子どもから深く聞くことや、感じ取ることをしてこなかったと。

学ぶことを強要されても、子どもは納得できません。自分でどう育ちたいか、何を学びたいかを決めたいという気持ち

がありますから。与えられた目標を達成すれば大丈夫、正解を覚えておけば生きていけるなんて嘘です。そもそも学ぶことは膨大で、何を学べば正解かなんて、大人が責任を持って言えるでしょうか。

幼児教育においても同じことが言えます。子どもは、赤ん坊の時から様々な形で気持ちを表現しています。だから、おむつを替えることひとつとっても、「おむつを替えたいけど、いいかな？」と聞いてあげてほしいと思います。断りなく肌に触れられるのは大人も嫌ですが、赤ん坊でも嫌だと感じます。丁寧に聞いてあげる、尋ねてあげることで信頼が生まれます。

そういった聞くことを保育方針としている園の保育士さんに聞いた話です——最初、とても戸惑ったそうなのです。ご飯を食べるか、お昼寝をしたいか、何をしても子どもに聞かないといけな。こんな面倒なことをしていいのかと。ところが、子どもたちが三歳になった時に、ものすごく自分の意見を言うようになったので、こんな三歳児を見ることがないと驚いたそうです。

聞いてもらえることで、自分の意見を言っている、大事なことは自分で決めるんだと、子どもたちが思えるようになるのです。常に子どもを主体と考える、子

どもから聞いて学ぶことが大事なのです。

いまこそ紙芝居を

語りの文化である紙芝居には、感じる意味での「聞く」要素が大いにあります。紙芝居を見ている側は、周りの子や演じ手の様子からさまざまなことを感じとります。一方、演じる側は紙芝居を語りながら、子どもたちが物語をどう捉えているか肌で聞きとっている。それによって、画面を抜くタイミングや語り口がかわってきます。

そうやって、聞き合うなかで、身体的なコミュニケーションの心地良さを体感していく。それは紙芝居が持っている人間形成作用だと思うのですが、これまでそういった紙芝居の教育的な価値は議論されてこなかったようです。

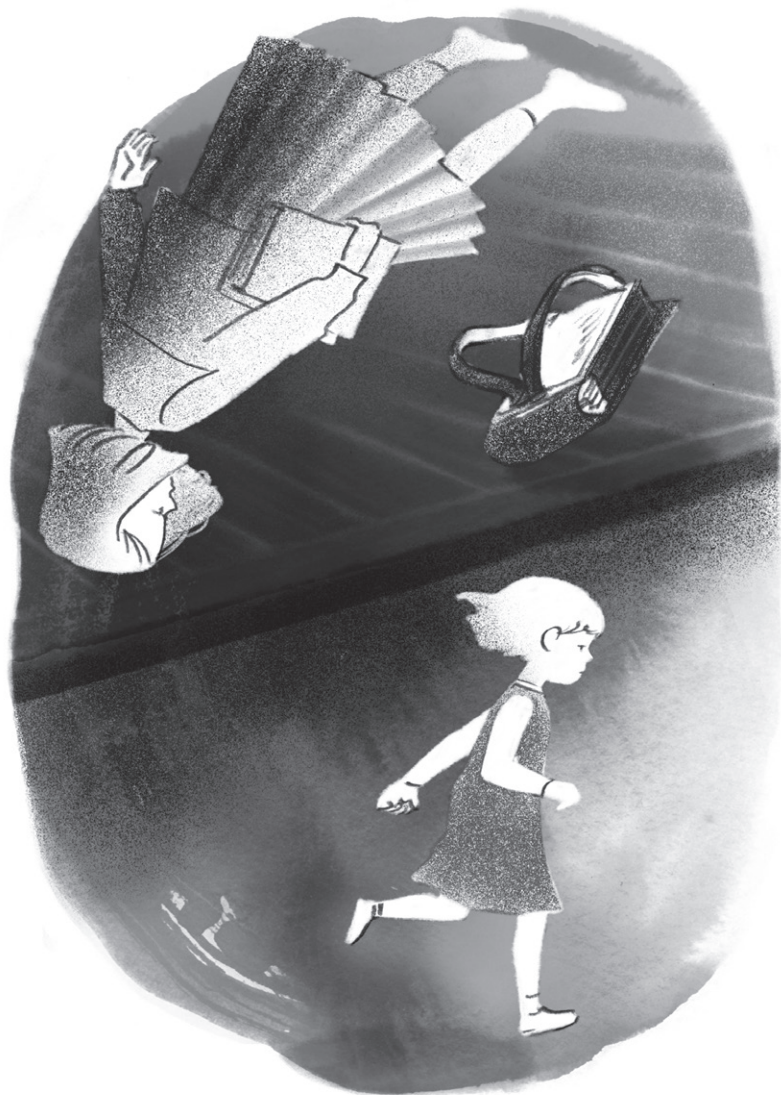
コロナ禍で社会がより無縁性の方向に加速してしまいました。ですから、子どもを育てる中で紙芝居を上手に取り入れて、子どもたちに、心と心が結ばれ合う体験をたくさんしてほしいと思います。

わたしの原風景

34

村中李衣

むらなかりえ／児童文学作家



イラスト／平澤朋子

小学校二年生まで、母親の実家の和菓子屋に母と二人で居候していた。厄介になっている母の兄家族に嫌われないようにと子どもながらに結構気を使いひっそり生きていた記憶がある。二つ違いの従兄はお人好しで優しくかった。較べて七つ違いの従姉は勉強がよくできて、ほとんど一緒に遊んでもらった記憶もなく、中学から戻ってくるとすぐに二階の自分の部屋に閉じこもり、そろっと部屋を覗いたりすると「閉めて」と睨まれた。

先日、佐藤真紀子さんが遊びに来てくれたおかげで十数年ぶりに山口市のサビエル記念聖堂を訪れ、事務局をしている従姉の「ねえちゃん」に教会の前で再会した。真紀子さんが「りえさんはちいさい頃どんな風でしたか？」と聞いた。するとねえちゃんは、遠い目をして「私が学校から帰ってくると、いつもこの子の赤いランドセルが店と母屋を繋ぐ土間にしつらえられた黒い焼き板の上がり框^{かまち}に放りなげてるの。たぶん母屋に上がりもせずに貸本屋に行ってたのね。毎日毎日よ。一日も欠かさず」。そして「あ、本っていうのはマンガ。貸本屋のマンガ」とさらり付け足した。

なんてこった！ よりによって真紀子さんの前で、ランドセルぽおんで、マンガに夢中だなんて！

ところが、しばらく間をおいて、ねえちゃんはつぶやいた。

「この子には、与えられた自分だけの場所なんてなかったから」

その瞬間、六十年の時の風に巻き上げられた。卵や砂糖の焦げた匂いと和やかな笑い声、敷き板に差し込む光が、胸をきゅうつと締め付ける。みんなのいる母屋に上げられず、職人さんの出入り激しい土間にもいられない。当時は冷たいとさえ思っていたねえちゃんがそんな私を憶えてくれていた。今思えば、ねえちゃんにも、他者が家族の中に入り込んできた息苦しさがあったはず。無邪気に踏み越えることができなかった上がり框が、寂しさの中で見留めてくれていたねえちゃんのまなざしのおかげで、原風景と呼んでもいい場所になった。

12月の新刊図書！

童心社のキャラクターグッズ

2023 14ひきのカレンダー

いわむらかずお／作

定価1760円（本体1600円+税10%）

3世代にもわたって愛されるロングセラー絵本「14ひきのシリーズ」のカレンダー。毎月、森で暮らす14ひきを描いた色彩豊かな絵を楽しめます。「カレンダーシール」つきで、家族のイベントを楽しく書き込めます。



とことこえほん

おだんごちょうだい

せなけいこ／さく・え

定価990円（本体900円+税10%）



あかちゃん、あおちゃん、きいろちゃん。みんなで、いち、に、さん。ぼうしも、ぶらんこも、いち、に、さん。でも、おやつが……。

とことこえほん

ぞうさんのおふろ

内田麟太郎／さく

村田エミコ／え

定価1045円（本体950円+税10%）



ぞうさんのおふろは、おおきなおふろ。おいでおいで、おふろにおいで。みんなでおふろにはいります。こころもからだもぽっかぽか。

読者の声

700号（2022年9月号）発行後に、読者の皆さまよりいただいたお便りを、ご紹介いたします。

700号おめでとーございます。私はその前の号の早乙女勝元さんのお話に、どう表現したらいいのかわからないほど心が揺り動かされました。知らないこともありましたが、ですから、これは少しでも多くの人に知ってもらいたいと思い、友達に紹介しました。作家や画家さんたちの素顔に出会えて楽しく、また、勉強になります。これからも頑張ってくださいね。
（東京都 女性）

700号、皆さまの努力がこんなに続いていたのですね。表紙の田畑精一さんの絵が、可愛くホッとさせてくれました。童心社はこれからもその出版理念を「母のひろば」を通して発信し続けてください。
（埼玉県 女性）

700号!! 続けることは大変なことですが、素晴らしいですね。私は毎回先に「あとがき」を読みます。編集者がどのような考えをお持ちなのか、童心社の未来を想像するからです。短い文章の中にも編集者としての姿勢や深い感性を感じ取ることができます。
（埼玉県 女性）

700号、おめでとーございます!! この冊子を通して、新刊絵本や紙芝居の情報をいただきたいです。「母のひろば」のますますのご発展をお祈りします。
（京都府 男性）

あとがき

●2022年が終わろうとしています。今年も子どもの本の世界にとって大切な方を何人も失いました。ロシアのウクライナ侵攻は終わりが見え、コロナもこれから第8波のピークが来ると言います。暗澹たる状況はありますが来年は明るい兆しが数多く見えてきてほしいものです。そして我々も子どもたちの灯火となる本をつくっていかねばと思います。◎

●浜田桂子さんが巻頭エッセイで触れられている、文科省が図書館宛に出した文書の報道を受け、「図書館の自由に関する宣言」を読みました。この決意表明も、戦時下の思想指導の歴史への反省から生まれたものです。今年も驚くニュースが多かったですが、歴史から学ぶことを怠らずに、依って立つところを見失わないようにしていきたいです。①

2022年12月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第703号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本梓 ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円（送料とも）。

